

令和 5 年度

「いわての復興教育」

実践事例集



令和 6 年 3 月
岩手県教育委員会

「いわての復興教育推進事業（いわての復興教育スクール〈沿岸〉）」実践事例

学校名：宮古市立第一中学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校学区は、宮古市の中心地で商店街も多い。直接海とかかわる家庭は少ないものの東日本大震災では、津波が浸水したり、台風 10 号でも浸水被害を受けたりするなどたびたび災害に見舞われている地域である。昨年度の学習では震災を体験した方のお話を聞き、マリンスポーツを体験することで、地域の自然の素晴らしさを実感すると共に災害の恐ろしさも学ぶことができた。また、宮古の魅力を調べる学習を通して、地域の復興についても考える機会となった。今年度は、釜石市と陸前高田市の施設見学や語り部のお話から震災被害及び復興の状況を学び、防災について理解を深めさせる。さらに、宮古地区の復興の在り方や自分たちが地域のためにできることについても考えさせ、地域づくりに積極的にかかわっていかうとする態度を育成する。

II 取組の概要

(1) 震災・防災学習「釜石・陸前高田訪問」

（陸前高田市の岩手県立野外活動センターでの宿泊体験学習の一環として）

ア 地域の復興の状況についての調べ学習

訪問地（釜石・陸前高田）について震災当時の被害状況や見学する施設について事前学習をした。

イ 「釜石・陸前高田訪問」当日

(ア) 「いのちをつなぐ未来館」の見学

釜石市のうのすまい・トモスにある「いのちをつなぐ未来館」にて震災語り部による講話を聞いた。地震直後からの映像や、館内に展示されている当時被害を受けた建物の一部や津波で流されたものから大きな被害であったことを感じた。また、避難所と避難場所の違いについて説明を受けて、自分の身を守るために、普段から安全な場所を知っておくことの大切さを理解することができた。



(イ) 「鶴住居川水門・防潮堤」の見学

防潮堤の上から海や街並みを確認し、震災で被災した以前の防潮堤も確認することができた。

また、遠隔かつ自動で動作する水門の開閉システムも見学した。手動式の開閉システムで犠牲者があったことから、震災の教訓を生かし復興へ歩みを進めてきたことを実感することができた。



(ウ) 「ワタミ・オーガニックランド」の見学

「すべての命が幸せになる仕組みづくり」を学べる環境配慮型の施設づくりを 20 年かけて取り組むプロジェクトの中心施設の見学をした。施設の方の場内案内の中で、震災復興から農業の再生、土づくりについても、様々なところと連携して取組を進めている状況をわかりやすく説明してもらった。震災の被害の大きさや、復興の進み具合を体感できた。

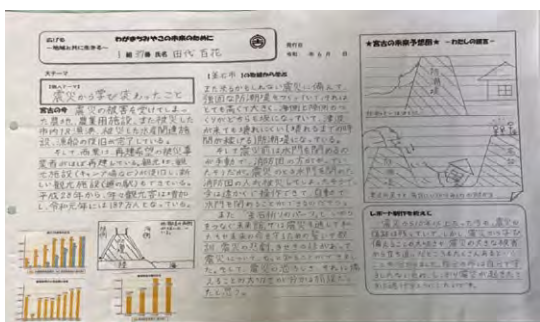
また、津波浸水区域にて植樹体験を行い、木を植える意味や木の役割について考えるきっかけになった。



ウ 事後学習

(ア) レポート作成

震災・防災学習のレポート作成を行い、釜石・陸前高田の復興の様子から宮古の未来予想図を作成した。

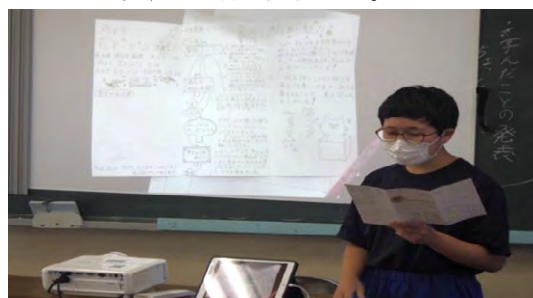


(イ) レポート交流会

宮古の未来予想図レポートを学級、学年で発表し、内容を交流した。

イ 職場体験学習のまとめ交流会

職場体験学習のまとめとして、体験場所の紹介や体験学習の内容のパンフレット作成を行い、グループ・学年で内容を交流した。



(ウ) 黒石野中学校との交流学习

黒石野中学校2年生の宿泊体験学習の一環として、宮古市立第一中学校体育館にて交流学习を行った。全体で震災・防災学習の流れを発表し、グループに分かれて、代表のレポート発表を通して、意見交流を行った。



(3) 取組のまとめ

今年度の復興・防災学習の取組のまとめを振り返りシートに記入した。

今後、次年度の修学旅行において、関東方面での防災学習につなげていく予定である。



(2) 職場体験学習

ア 職場体験学習の実施

実際に宮古の事業所で働く体験を通して、震災から復興までの努力と苦勞を知り、自分たちにできることを考える機会とした。宮古の未来予想図をうけて、地域で活躍している方々と触れ合うことで、宮古の街づくりに関わろうとする意欲を高める機会となった。



III 取組の成果と課題

1 成果

- ・1年次には自分たちの住む地域の復興学習、2年次には県内の沿岸地域の復興学習を行い、わが町「みやこ」の復興と比較して自分たちが未来に向けて取り組むべきことを意識することができた。
- ・体験的な学習を充実させることによって、実感を伴う学びを展開することができた。
- ・学習のまとめを通して、自分の生き方を考えるいきっかけになった。地域の復興に携わりたいという思いを持つことができた。

2 課題

- ・今後、震災以降に生まれた生徒に対して復興学習を継続していかなければならない。そのために自分の生き方をみつめていくための手立てや指導が必要である。
- ・復興の担い手として、一人一人がこれからのまちづくりの一員であることを自覚させるような場面をたくさんつくっていかねばならない。